一つの季節

臼井吉見

筑摩書房

一つの季節

©臼井吉見
一九七五

一九七五年十一月二十日第一刷発行
一九七六年一月十日第二刷発行

1200

著者 臼井吉見

発行者 井上達三

印刷 明和印刷
製本 矢島製本

発行所 筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京六―四一二三
電話東京二九一―七六五一

Printed in Japan 0093—80127—4604

一つの季節

装幀　辻村益朗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

一つの季節……五
春一番……一五五

一つの季節

前篇

駅前通りをしばらく歩いて、どぶ川に架った土橋を渡ると、すぐ右手に、その闇マーケットが目についた。マーケットといっても、道ばたから引込んだ小路をはさんで、両側に六七軒ずつ立並んでいるだけのもので、見るからに、暴力団による、にわか仕立てを思わせるものであった。左手のとっつきが八百屋で、大根、ほうれんそう、ねぎなどを並べたてた屋台の隅に、蜜柑が山と積みあげられ、いくらかの林檎も見えた。とっときの晴着でも農家に持ちまわらないかぎり、手に入りがたい品々だけに、緑と黄と赤とのまじった、まぶしいような色合を立ちどまって、しばらく見つめたまま、立ち去る主婦が後を絶たなかった。とうてい手の出せる値段ではなかった。八百屋につづいて、戸口はしまっていたが、浅黄の大風呂敷のようなものに、タンポポと切りぬいた黒い布を縫いつけた暖簾がぶらさがっていた。

のっぽで大柄な野々山一作が、一気に遣戸を引あけると、勢あまって、びっくりするほど大きな音がした。野々山につづいて、多田亮平が顔を出すと、

「おどかすねえ、二人づれの刑事みたいにさ。それとも、仇討かね。僕ァ、なんにも悪いこたァしてませんよ。ちょっくら、ここのママに惚れただけですよ」

いきなり、そんな言葉がとんできた。せまい土間の、松板一枚のカウンターの前に、これまた一枚板の長い腰掛のしつらえがあるのに、とっつきの六畳にあがりこんだ鳴海透は、トンビにくるまったまま、乱れた蓬髪をせわしくかきあげて、大げさに驚いたふりをして、顔いっぱいに、笑いをためてみせた。

さっさとあがって、鳴海の横にあぐらを組んだ野々山に、左手でコップをつきつけた鳴海は、右手でビールをついだ。

「こんな酔漢のお伴はたまらないでしょう」

ビールをつぎながら、多田にそう話しかけてきた。たがいに、まったくの挨拶ぬきだった。

「酔漢て鳴海さんのこと？」

「無論、野々山さんですよ。僕ァ酒はたしなむけど、酔ったりなんぞしませんよ」

「おや？　酒ハ酔ウタメノモノデス、ホカニ功徳ハ……」

と多田が言いかけると、ビール瓶をふってさきを言わせず、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「なァんだ。つまらないところばかり覚えているね、この人は。あの傑作の愚かなところだけを……」

早くもてれて、顎のあたりを、やたらに撫でまわしてみせたが、

「そうそう、ここの酒は、さっぱり酔わしてくれねえんですよ。黒タンポポのママに惚れぬいて、さっきから口説きに口説いているんだけれど、とんと効き目がねえ。何しろ、しっかりしているんだ。それに、こわいねえ。うちの女房に負けないくらいこわいねえ。野々山さん、応援してくださいよ」

それまで一言も発しなかった野々山は、あけたコップを勢よく返すと、

「鳴海さん！　飲みましょ」

まるで気合をかけるみたいな調子だった。

「あんなこと、おっしゃるけれど、……さっきから小野篤之介さんのお話を綿々とおつづけなさって、滅入っていらっしゃるので、どなたかお見えにならないかとお待ち申していたところでございました。……よういらっしゃいました。ごあいさつもしないで失礼いたしました。おはつにお目にかかります。わたしは……」

娘時代のものらしい、古びた銘仙のきものに、紺絣の前垂をしめて、小柄で眼もとの涼しげなマダムであった。

「お待ち申していたところでございましたか。しっかりしていらっしゃるでしょう。僕が紹介しよう。このママはね、満鉄高級社員の未亡人だが、欠点は警戒心旺盛で、酔っぱらいには、いたって冷酷だということ。暖簾の黒タンポポは、愛する夫君の喪に服しているしるしらしい……」

「黄いろのきれがほしかったのですけれど、あいにく黒しか手持ちがなかったものですから。すみません」

「弁解はよろしい。おお！　満州！　僕も敗ける前に、満州へ行ってみたかったナ。金州城外斜陽ニ立ツゥ。乃木大将はいいねえ。乃木大将はおごそかに、みめぐみ深き大君の、大みことのり伝うればァ……」

「お酔いにならないうちに、どうぞ土間へおりてください。子供たちが泣き出しそうな顔をしておりますから。お願いします」

小学一二年生と見える男の子と、三つか四つの妹が、奥の三畳で遊んでいたが、いつのまにか出てきて、母親にとりすがって、おびえた視線を闖入者たちに注いでいた。

「鳴海さん！　飲みましょ」

野々山は、それだけをくりかえして、しきりにコップを鳴海につきつけた。彼らは、コップをつかんでいないときは、めったやたらに、たばこをふかした。

「お願いです。どうぞ、いまのうちに、土間へおりて下さい。お願いします」

マダムの懇願ぶりも懸命だった。

「女って、どうして、こう揃いも揃って、しっかりしているんだろうねえ。乃木静子刀自も、黒タンポポの未亡人も、うちの女房も……そう、そう。小野篤之介の細君ね、あれがまた、しっかり者なんだ。ただし、これは、三人のように、冷酷無慚じゃない。滅法熱烈なんだ。肺病の小野の口んの中でつかえてる血のかたまりを吸いとってやっていたそうだからね。……小野は死ぬ気で小説を書いていたんだよ。あいつとは二度会っただけで、作品も短篇を二つ読んだだけだがね。一か月前、としの暮の銀座の酒場で、はじめて逢ったとき、なんて哀しい男かと思ったね。見ていてつらかった。大阪から東京へ攻めのぼって、死ぬ気で新聞小説を書きとばし、読者の喝采をあびながら、中途で討死したんですよ。やれ自重が足りなかったとか、やれ自殺同様だとか、例によって、したり顔の批判を加えているむきがあるが、そんな恥知らずは、もうやめろ！　自殺がどうしていけねえのか？　小野を殺したのは、お前たちじゃないか！　……小野君、よくやった。僕ァ告別式で、そうほめてやりましたよ」

小野の話となると、にわかに熱っぽい口吻に変った。小野篤之介の急死は、鳴海透にとって、ただならぬ衝撃のようであった。一二度、袖がふれただけであるのに、共通の運命的なものを感じとっているらしかった。

大阪生れの仕出し屋の伜で、現代町人物の妙手として、早くから文壇に出た小野篤之介は、デカ

ダン気味の奔放な作風が、世相人心にうまく呼応して、戦後みるみる人気作家におしあげられてしまった。鳴海透よりは、三つ四つとし下で、文壇では最年少の作家だったが、肺疾の身を駆りたてて書きまくり、大量の血を吐いて死んだのは、正月早々のこと、告別式は、つい三日前であった。芝の天徳寺の通夜には、鳴海も出席したが、作家では彼一人だけ。ほかは数名の雑誌記者が集ったばかりであった。鳴海の胸底には、その忿懣がくすぶっているようであった。

「黒タンポポのママさんよ！　そんなこわい顔をしていないで、機嫌よくついでやってくれよ。野々山さんが、なま酔いで、さっぱり気勢があがらないじゃないか」

「鳴海さん！　飲みましょう！」

すかさず、野々山は大きく叫ぶと、自分でビールをついで、一気に飲み干した。大きな掌でコップをわしづかみしたまま、それを二回くりかえした。

「ママよ、満州の夕日が落ちる歌があったっけね。あれを唄ってくれないか、たのむ」

「そんな歌、ございましたでしょうか？」

「意地わるなんだネ、君は。そんならいいんだ。ところでママよ。日本がいくさに敗けて、この太郎君と花子ちゃんをつれて、――名前がちがうかもしれないが、そんなことどうだっていいんだ。三人づれで、帰国したときさ。海を渡ったんだろ、大きな海を渡って、帰ってきたんだろ。寂しかったろうねえ、大きな海って寂しかったろうねえ。……僕がまだ疎開しないころは、毎日のように近

所に爆弾が落ちた。僕ァ死んだってかまわねえが、うちの花子の上に落っこちたら、この子はとうとう、海というものを見ずに死んじまうのだと思うと、つらくって、つらくって。僕ァ津軽平野のまん中に生れたから、十歳のとし、はじめて海を見たんだ。そのときの大興奮は、いまも忘れない。この子にも、せめて一度は、海を見せてやりたいと思った。うちの花子は五つだった。まもなく、三鷹の家は爆弾でこわされたが、誰も傷を負わなかった。僕は女房の里の甲府へ移ったんだ。ここも焼夷弾にやられ、いよいよ、僕の生れ在所へ逃げこむよりしようがない。死場所はそこしかないんだ。三昼夜かかって、秋田の能代までたどりつき、五能線に乗り換えてほっとしたね。海の見えるのは、どっち側ですか？　僕ァまず車掌にそれを尋ねたもんだ。花子！　海が見えるよ。もうすぐ見えるよ。大きな海が見えるよ。僕ァもう興奮しちまって、ほら！　海だよ、ごらん、海だよ、海って大きいだろう。ほら、海だ、ね、海だよ、大きいだろう、と呼びかけても、川だわねえ、お母さん、と花子は平然としている。うん、そうそう、と女房のやつ、半分眠りながら答えている。愕然としたねえ、僕は。……女って、どうしてこう、泰然自若、ものに動じないのだろうねえ。こわいねえ。でも、黒タンポポのママよ。あのとき、あなたはそうじゃなかったろう？　太郎君と花子ちゃんをつれて、大きな海を渡って帰ってくるとき、とっても寂しかったろうねえ、そうにきまってるよねえ……」

「鳴海さんは海を見たのが十歳ですか。おれは十二だった。尋常六年の修学旅行で、越後の鯨波の

海を見た。みんなで海ばたまで駆けて行って、てんでに、海の中へ片手をつっこんで、それをなめ合っては、しょっぱい、しょっぱいって喜んだものだった。そうですか。十歳ですか、鳴海さんが海を見たのは……」

野々山は、中途から涙ごえに変った。その突然の変化が、多田にはのみこめなかった。野々山の両眼には涙がいっぱいたまって、両頬を伝わって次々にすべり落ちる。両の腕を代る代るあげて、やたらに顔をこするので、顔じゅうが涙で光っている。こんな野々山を見たのは、はじめてだった。多田たちの仲間と飲むときに、こういうことはこれまでなかった。多田は奇異な思いで、野々山を見、鳴海を見た。タンポポのマダムも、怪訝そうな顔つきを隠そうとはしなかった。

「そうそう、大野明を知ってるでしょう。僕の家族が甲府に疎開中、三鷹の家の留守番役を引受けてくれた大野明ですよ。ハンス・クリスチャン・アンデルセンを敬愛してやまぬ大野だよ。あの大野が、この二十日すぎ、夕張へ行くことにきまったんだよ。うちはせまいが、同居できない事情はない。闇買をつづけなくちゃ生きて行かれないんで、思いつめたのだろうねえ。引留めてみたが、駄目だった。けっきょくは、僕の家族への遠慮だろうねえ。可哀そうだが、仕様がねえ……」

「大野さんが？　夕張へ？　何しに？」

思わず、多田が訊きかえすと、

「夕張炭坑ですよ。石炭掘りにさ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c